論文要旨

学位論文題目「増賀説話の形成と展開」

髙橋美香

遁世者の理想像として日本の中世説話集に登場する増賀（九一七～一〇〇三）の説話の形成・展開・変容を、増賀が隠棲したとされる多武峰（現、奈良県桜井市の談山神社）の仏教文化にも目を向け、三章にわたり述べた。

第一章は宮内庁書陵部所蔵『春夜神記』（近世初期写本）所収の新資料を考察の対象にした。第一節では、辞世和歌の「くらげの骨」とは、聖衆来迎という極楽往生の証の比喩で、その一首で増賀の往生が証明され、増賀が法華持経者と理解されていたことがわかった。第二節では増賀の臨終の様子と改葬をめぐる奇蹟譚を記録した「僧道義注進状」の検討を行った。この記録は、その往生譚と奇蹟譚を寺内で共有するために文書化され注進されたと位置づけた。増賀の臨終譚では法華持経者として往生したと理解されており、後の往生伝の原形として影響を与えたと考えられる。

第二章では、院政期から室町期までの特徴ある増賀説話を考察し、増賀の人物像の形成と変容を検討した。第一節では、『続本朝往生伝』〔一二〕は、編者大江匡房の舅素意が伝承者であったと推測した。第二節では、増賀と寂心の邂逅を中心に、場面設定は、寂心の出家まもなくの、夏安居の時期の横川飯室谷ではないかと推測した。増賀説話の形成には、不動信仰にもとづく仏典享受の影響下にあったと私見を

述べた。不動経の享受によって、中世における増賀説話は新たな展開を遂げたと考えた。　第三節では、『三国伝記』一〇の一五を検討した。「五条西洞院」に住む母という設定は、あらかじめイメージを喚起させるものであった。増賀説話においては、室町時代になると高僧と母の結びつきが重視され変容を遂げたと位置づけた。増賀の母が往生を遂げるのではなく、再婚という形で現世利益を得るという孝行譚の形成には、「五条わたり」に代表される物語の場面設定が影響していたと言える。

第三章は、増賀にまつわる近世書写の新資料である陽明文庫所蔵『南山講式』と、肖像画を中心に考察した。『南山講式』には、『増賀上人行業記』、『談山如意輪観音記』が合写されている。第一節では、『南山講式』が、室町時代の多武峰において、中興の祖である増賀を称揚する営みがあったことを示す資料であると位置づけた。増賀は法華持経者として、中世の多武峰では捉えられていた。第二節では、『増賀上人行業記』絵巻の談山神社所蔵本を中心に考察した。その成立は陽明文庫本の奥書にある寛文十一（一六七一）年であり、妙心寺の祖淳が記したものと推測した。第三節では、『談山如意輪観音記』と談山神社に現在唯一残る仏像との関係性を考察した。この資料は寛文八年成立で、享保十二（一七二七）年版が刊行され、如意輪観音像の霊験が伝えられることとなり、明治時代の廃仏毀釈の嵐の中をくぐり抜け、唯一残り現在に至った。第四節では、「性空上人像」群と「増賀上人像」の比較を通じて、増賀の肖像画が「性空上人像」の借用で描かれ

たのではないかと指摘した。これは、法華持経者としての説話伝承による増賀のイメージの図像化である。

増賀の伝記が説話として生まれるのは、十一世紀の『本朝法華験記』や院政期の『続本朝往生伝』が最初であると言われてきたが、入滅の記録である「僧道義注進状」や「結縁衆詩歌」がこれらの原形であった。中世には『今鏡』・『発心集』の増賀と寂心の邂逅譚に見られる、不動信仰にまつわる仏典享受による増賀説話の展開が見られた。さらに、先行研究が扱いかねていた『三国伝記』については、室町時代に至って増賀説話が奇行譚ではなく母への孝行譚として大きく様相を変えたことは増賀説話の中世的な変容と位置づけられる。一方、多武峰では、様々な逸話が付加されてはいても、増賀を法華持経者として捉えていたことで一貫している。多武峰では、中世末から近世にかけて、増賀の人物像が新たな変化を見せることはなかったが、肖像画や講式、絵巻物など新媒体の作成という新たな展開が見られた。従来、室町時代の成立とされ、増賀説話の最終形態と見なされてきた『増賀上人行業記』は、江戸時代前期の成立であり、中世末から近世前期の多武峰における文物の作成という増賀信仰の新展開の中に位置づけられる。近世には増賀の奇行譚は新しい展開を見なかった。増賀説話も中世の終焉と共にその奇行譚が終結したのであった。それは、法華持経者としての高僧のイメージが先行したからであろう。増賀を取り上げた本学位論文の視点や考察の手法は、他の高僧伝・高僧説話についての形成・展開・変容を考える一つの指標になるだろう。